



写真-1 御着城濠跡に移築・保存されている天川橋（平成 29 年9月撮影）

■ かつて天川に架かっていた旧西国街道の石橋「天川橋」

姫路市御国野町の国道2号に面した御着城址公園には、西国街道が天川を渡る所に架かっていた石橋「天川橋」が保存されています。（写真-1）

この場所は、公園内にある姫路市東出張所の建物のすぐ裏手で、かつて天川を利用して御着城の周囲にめぐらされた濠があったところです。近くにこの橋の説明板があり、そこには右のように記されています。

天 川 橋

姫路藩が文政 11（1828）年に、この地より南西 200m の旧西国街道の天川に架橋した総竜山石製の太鼓橋。全長 26.6m、幅 4.45m、高さは約 5m で、橋脚は 5 本。播州印南郡の石工、瀬助・仲右衛門の作。姫路藩儒者・近藤顧一郎撰の銘文が刻まれている。橋の東北詰めには、高札場があった。

昭和 47 年 9 月 9 日の出水で、中央部橋脚が崩れ橋桁が落下したため撤去し、昭和 53 年 10 月現在地に移設保存した。高さは、地形に合わせて低くしている。地形中央部の低いところは御着城の濠跡。

平成 13 年 2 月

姫路市教育委員会

■ 江戸後期に土橋から石橋に架け替え

江戸中期の明和元（1764）年頃に、萩藩の絵図方・有馬喜惣太が中心となって書かれた『中国行程記』によると、「国分寺を抜けた街道は、二間の土橋^{*1}と天川に架かる五間の土橋を渡って御着の宿に入る」と記されています。街道の両側にはびっしりと町屋が並び、真ん中あたりに本陣・尼川（天川）久兵衛があり、寺院や神社もあって、古くから栄えたところだったようです。

ここに記されている「五間の土橋」が、文政 11（1828）年に姫路藩によって石橋に架け替えられました。石材は、近くで産出される竜山石^{*2}（たつやまいし）が使用されています。

※1 土橋（どはし・つちはし）：木橋の一種。丸太を隙間なく並べて橋面を作った場合、橋面が凹凸になる。そのままでは歩きにくいので、そこに土をかけて踏み固め、平らにしたものが土橋である。江戸時代まで日本の川にかかる橋の大多数は土橋で、かなり長い橋もこの方式で造られた。板を橋面にした板橋は重要な箇所に限られ、石橋はごくわずかであった。

※2 竜山石：近くの高砂市で採れる流紋岩質溶結凝灰岩で、中生代白亜紀（8,000 万～9,000 万年前）の火山活動で噴出した火山灰などが固まってできたもの。加工しやすいことから石材として広く利用され、古くは仁徳天皇陵などの石棺に使用された。7 世紀頃に造られた「日本三奇」（宮城県御釜神社の神竈、宮崎県霧島東神社の天の逆鉾、石の宝殿）のひとつ、宝殿山の中腹にある“石の宝殿”の約 500 トンの石も竜山石で、生石（おうれい）神社の祭神として祭られている。江戸時代初期、慶長年間の姫路城や明石城には、石垣などの建築構造資材として竜山石が大量に使用されている。天保 7（1836）年、姫路藩の専売品となり烏居・燈籠・狛犬・石臼・石垣・石段などに広く利用され全国に供給されていった。地元では宝殿石と呼ばれて、今でも建築・造園用の石材として広く利用されている。伊保山を中心とした山々の垂直に切り立った石切場の岩肌は、高砂の特徴的な景観の一つとなっている。伊保山、竜山などに登ると、山の尾根上に古い時代の石切場の跡を見ることができる。

右下の写真-4 は、国道 250 号・竜山大橋西詰の法華山谷川右岸堤防敷に保存されている「竜ヶ鼻（たつがはな）」で、「竜山」の由来となった岩である。波の浸食によって削られ、形が竜の頭部に似ていることからこの名がついた。元々「竜ヶ鼻」は、法華山谷川まで伸びていた竜山の尾根の先端部で、明姫幹線・竜山大橋の右岸橋台の施工に支障となったため、昭和 51（1976）年に切り取られ、現在地に移設されたものである。



写真-2 宝殿山中腹にある生石神社



写真-3 石の宝殿（俗に“浮石”という）



写真-4 竜ヶ鼻

■ 天川橋築造に関わった石工・瀬助と仲右衛門

天川橋東端付近の親柱には、南面と北面に文字が刻まれています。（写真-5・6 参照）南面には、天川橋築造工事の竣工年と築造に関わった石工 2 名の名が刻まれ、北面には姫路藩の儒者・近藤顧一郎^{※3} 撰による天川橋を賛美する銘文が刻まれています。



写真-5 親柱の南面

文政十二年二月成
播州印南郡 石工
瀬助
仲右衛門



写真-6 親柱の北面

天川橋銘
誰命天川名 豈問支機在
虹染飛架空 昂々浮霞彩
截漸々之石 驛路度千載

「竜山石の文化会」会報 No.2 によると、築造に関わった石工、瀬助（せすけ）と仲右衛門（ちゅうえもん）は、瀬助の次に仲右衛門の名があることから、親子、もしくは師弟の関係だったのではないかとされています。そして、仲右衛門は、高砂市米田町神爪にある覚正寺の過去帳から、以下のような生涯だったそうです。

文化元（1804）年生石村に生まれ、文政 11（1828）年 25 歳の時に、御着村・天川橋を印南郡の石工・瀬助と共に築造します。天保 7（1836）年 33 歳の時、「観瀾処※4（かんとうしょ）」の文字を加茂山崖に刻み、慶応 3（1867）年 5 月 18 日、64 歳で没しています。

仲右衛門が天川橋築造に関わった時は弱冠 25 歳だったので屋号はついていなかったようですが、石工衆の棟梁として「観瀾処」（写真-7）を刻んだ時は 33 歳で、加茂山登山口脇にある「観瀾處三大大字碑」（写真-8）の標柱側面には、「生石村石工 雲根室仲右衛門」という屋号のついた名が、江戸硯匠および加茂神主の名と肩を並べて刻まれています。

※3 近藤願一郎：山崎闇斎の崎門学派に連なる儒者で、三田藩の 10 代藩主・九鬼隆国が設立した藩校・造士館の教授にもなっている。この漢詩は、借金で破綻寸前の姫路藩を立て直した姫路藩家老・河合寸翁（かわいすんのう）の仁寿山校に迎えられ、客分の形で赴任していた時のものと思われる。



写真-7 「観瀾處」



写真-8 「観瀾處三大大字碑」

※4 観瀾処：姫路藩主酒井侯が眺望絶佳の地として賞嘆した“波のうねりを望む”景勝地・加茂山の南斜面の露岩部に、天保 7（1836）年姫路藩の儒者 永根伍石の息子・永根文峰（ながねぶんほう）の書を、家老の河合寸翁が刻ませたもの。

■ 昭和 47 年 9 月の洪水で落橋

天川橋は文政 11（1828）年に架けられ、昭和 47（1972）年 9 月の洪水で落橋するまで、140 年あまりの長期にわたり現役の道路橋でした。

過日、現・天川橋付近で写真を撮っていると、近所のおじいさんが、「石橋のこと、調べとるんか。」と聞くので、「ええ、まあ。」と答えると、いろいろと昔の話をしてくれました。

1 おじいさんは昭和 10（1935）年生まれで、「小さい頃、この石橋を木炭自動車のバスが走とった。それに掴まって遊んどってよう怒られたもんや。」とか。交通量の増加によって石橋はかなり傷んでいたようで、石橋の部材の一部がコンクリート製になっているところもあり、補修しながら何とか持たせていたことが伺えます。（写真-16 参照）



写真-9 現・天川橋



写真-10 旧天川橋（昭和 44 年）（『姫路今昔写真帖』から引用）



写真-11 旧天川橋（昭和 44 年）（『姫路今昔写真帖』から引用）

昭和 47（1972）年の洪水で橋の中央部の桁が落ちてしまったため、一旦解体し、昭和 53（1978）年、御着城址公園に落橋した箇所を幅を半分に狭めた形で移築保存されています（写真-1）。石橋撤去跡には、写真-9 のようなごく普通の鋼橋が架けられています。

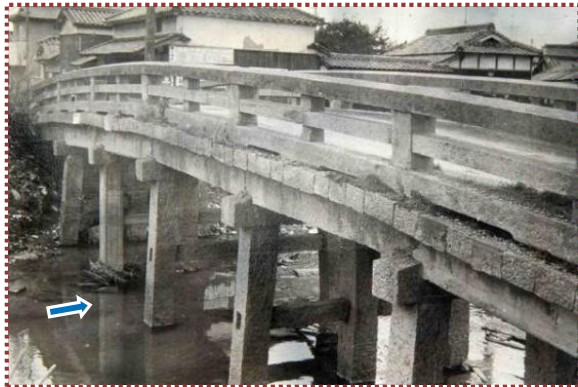


写真-12 天川に架かる旧西国街道・旧天川橋（現地説明板から引用）



写真-13 昭和 47 年 9 月の洪水で落橋した旧天川橋
（姫路みなとミュージアム展示写真から引用）

なお、昭和 47（1972）年は兵庫県で災害が多発した年で、6 月、7 月、そして 9 月に 2 回、計 4 回も災害が発生しましたが、天川橋が落ちたのは、9 月 8 日～9 日にかけての弱い熱帯低気圧と秋雨前線がもたらした大雨によるものです。低気圧が紀伊水道を東へ通過したため、8 日午前から雷を伴った雨が降り出し、9 日早朝にピークに達しました。姫路での総雨量は 123mm で、県南部で浸水が相次ぎ、土木、農林施設に多大な被害が発生しました。

■ 御着城址公園の御着城濠跡に移築・保存された天川橋

天川橋は、洪水により中央部下流側の橋脚が崩れ、上部の橋桁や床板が河中に落下しました。その際に桁材や床板の一部が破損したため、中央部の上部工（桁や床板）が一部復元できず、石橋の部材が天川橋の傍に積み上げられています。（写真-17）

なお、石橋は移築の際に、落橋した箇所を目につきににくしようとしたのか、東西が逆になっているそうです。



写真-14 落橋した中央部を狭くして復元



写真-15 落橋した中央部は橋脚だけが復元されている



写真-16 左の城郭風の建物は姫路市東出張所（御国野公民館）



写真-17 天川橋の中央部分



写真-18 コンクリート製に置き換えられた部材



写真-19 落橋した中央部の石材



図-1 天川橋および御着城址周辺の地図

なお、写真- 6 の親柱に刻まれた銘文について、意味は概ね理解できますが読み下しがうまくできません。どなたかきちんと読み下してください。なお、個々の語句の意味は下記の通りです。

- ・「虹梁」(こうりょう)：虹形に反り返った梁
- ・「霞彩」(かさい)：夕焼け雲の美しい彩り
- ・「昂々」(こうこう)：元気よく
- ・「截」(せつ)：切断する
- ・「駅路」(うまやじ)：宿場のある街道、宿場
- ・「千載」(せんざい)：千年

■ モノローグ

天川橋が 140 年余りもの長い間、現役の石橋として使用されていたことに正直驚いています。30m 足らずの川幅に 6 径間の石橋です。ちょっとした洪水で流木が引っかかって水位が上昇し、その圧力で橋脚が破損、流失していたとしても何の不思議ありません。

ひょっとすると、天川の水を引き入れ御着城の周囲にめぐらされた濠が遊水池あるいは洪水をバイパスさせる役目を果たしていたのかも。いずれにしても、何度も被災し、その都度補修を繰り返してきたのではないのでしょうか。

【参考資料】

- 1 『石の文化』会報 No.2 竜山石の文化会 平成 4 年 11 月
- 2 『兵庫の河川事業 50 年のあゆみ』兵庫県土木部河川課 平成 3 年 3 月
- 3 『播磨の街道～「中国行程記」を歩く』橋川真一著 平成 16 年 1 月
- 4 『御着城』フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

キミガヨラン (君が代蘭)

リュウゼツラン科ユッカ属の常緑低木。JR 御着駅のホーム近くに咲いていた。北米原産で、江戸時代の天保年間(1830~1844 年)に日本に渡来。花期は、夏(6 月~8 月)と秋(10 月~11 月)で、高さは 1.5~2m。葉の根元から円錐花序を直立して、釣鐘形の花を下垂し、夜に開き、独特の芳香がある。果実は虫媒花だが、日本では受精を媒介するユッカガがいないので結実しない。同じ仲間のリュウゼツランは、100 年に 1 度しか咲かないといわれているのに、キミガヨランは 1 年に 2 度も咲く。仲間の多くが観葉植物として育てられている。



写真-18 キミガヨラン

※発行：平成 29 (2017) 年 12 月 『ひょうご水百景』No.79
改訂：令和 8 (2026) 年 5 月 『ひょうご水百景』No.79